

機関番号：32663

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520249

研究課題名（和文）19 世紀末「アメリカ文化圏」の構築をめぐる研究、国際小説家サークルを中心に

研究課題名（英文）A Study of “the American Cultural Circle” Constructed at the End of the 19<sup>th</sup> Century: Focusing on the International Novelists

研究代表者

北原 妙子（KITAHARA TAEKO）

東洋大学・文学部・准教授

研究者番号：90315820

研究成果の概要（和文）：本研究は、19 世紀末、一連の交流があった英米の文化人たち、特に大西洋の両岸で活躍した人物たちの残した文化的・文学的仕事に着目し、ひとつの「文化圏」が構築されていた模様を明らかにすることを目的とする。中でもイタリアに在住した米小説家、F. Marion Crawford を中心に研究を進め、文芸思想から大衆文化にまで至る幅広い影響力を観察した。同時に彼の父である彫刻家 Thomas Crawford の経歴や作品を追跡することで、実は世紀末に国際小説家を中心に構築されたと考えていた「アメリカ文化圏」が、既に 19 世紀中葉、幅広い分野の人材を含む母胎を形成しはじめた様子が実証できた。

研究成果の概要（英文）：This study explores how a kind of “American Cultural Circle” was constructed at the end of the nineteenth century among Euro-American intellectuals--international novelists in particular, who were friends, confreres, and rivals. Here, I especially pay attention to an American novelist who lived and worked in Italy, F. Marion Crawford, as the key person of this movement. After examining his literary/cultural works, I have observed the novelist’s wide-ranging influence on various cultural dimensions, from literary criticism to popular culture. Simultaneously, I have researched the novelist’s father, Thomas Crawford, an American sculptor. By surveying his career and sculptures, the study has demonstrated that what I previously considered the “American Cultural Circle” among the international novelists had actually already begun to appear in the mid-nineteenth century, including diverse figures, such as lawyers, historians, poets, and socialites.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：文学

科研費の分科・細目：英文・英語圏文学

キーワード：(1)米文学 (2) 米文学史 (3) F. Marion Crawford (4) Thomas Crawford (5) 新古典主義アメリカ彫刻 (6) イタリア (7) Henry James (8) ロマンズ

## 1. 研究開始当初の背景

1980年代から始まるアメリカ文学史の見直し論争は、2005年にケンブリッジ版の『アメリカ文学史』シリーズ最後の巻が出て一段落した印象だ。同書は人種・ジェンダー・エスニシティ・階級などの差異にも細かく配慮した包括的で大部な研究書だが、それでも再考されなかった作家・作品の一例が F. Marion Crawford である。

リアリズムが台頭してきた時代、クロフォードは独自の創作理論を展開し、ハウエルズやジェームズと同格に論陣を張りロマンス作品を擁護していた。実人生でもジェームズとクロフォードは交流があり、他にもイザベラ・ガードナーやウィリアム・ジェームズなどとの相互交渉も観察できる。ハウエルズやジェームズは、周知のようにアメリカに「小説芸術」を築こうとした。クロフォードも同様で、イタリアに生まれて育つというコスモポリタンな生い立ちを活かし、ヨーロッパ、特にイタリアを舞台とする「ロマンス」作品でアメリカ人を魅了した。クロフォードは「小説は娯楽である」という独自の文学論を展開、実践し、人気作品を次々と書き、いくつかの小説は20世紀に入るとサイレント映画化される。彼・彼女らはお互いの交友やライバル意識が刺激となって、それぞれが考える「アメリカ文化」を創出し、現在につながるハイカルチャーから大衆文化の源流を築いたと考えられる。

## 2. 研究の目的

上記の国際小説家たちのサークルの相互影響から、どのような文化が生じたか、そしてそのような文化圏が形成された背景について考察したい。

(1) 具体的には、まずリアリズム文学と

その成立の裏に欠かせないロマンスについて、Howells、James、Crawford の思想と作品を中心に再考する。

(2) クロフォードの(歴史)ロマンスとその映画化の問題について検討する。クロフォード作品は1915から1933年に三作品が映像化され、そのうち二作はリメイク版も作られた。いかにクロフォード作品が小説の映画化に道を開いたか、初期の映画制作者が注目した点など具体的に分析したい。

(3) そして、今回は国際小説家サークルの核としてクロフォードをとらえ、伝記的側面の調査も深める。彼がイタリアで生まれた理由は、彫刻家の父、Thomas Crawford がローマを仕事場としていたからだ。彫刻家の研究は少ないが、イタリアに憧れた多くのアメリカ人芸術家の中でも成功を収め、後にジェームズたち国籍離脱者が模倣する生き方に先鞭を付けた点からも、彫刻家クロフォードの伝記・作品を調査、考察する。

## 3. 研究の方法

3年計画で、19世紀末「アメリカ文化圏」の両極、ハイカルチャーならびに大衆文化が創出される過程を俯瞰する。

初年度はハイカルチャーの代表として

「リアリズムとロマンスの再定義」を試みる。リアリズム・ロマンスについては議論が盛んに行われてきたが、これまで出版された資料を整理し、問題の洗い直しをした上で、国際小説家たち、Howells、James、Crawford の仕事を読み直しながら文学思潮史を再検討する。文献収集・解読を中心とする。

2年目は大衆文化への橋渡し役ともなる「クロフォード作品の映像化」について考察。クロフォードのロマンス小説は3作品が映像化されているので、それぞれについて分析

し、小説の映画化の先駆となった要素や映像化の問題について吟味したい。具体的には UCLA Film Archive など実際映像化された作品を視聴し、他にも映像についての活字資料を集め、分析・考察を進める。

3年目は、クロフォードの父で彫刻家の Thomas Crawford についてその作品ならびに人物像を調査し、当研究で考える 19 世紀末「アメリカ文化圏」成立の中心となる人物の周辺についても明らかにすることで、総合的に「アメリカ文化圏」とはどのようなものだったのか探りたい。Robert Gale による唯一の評伝を手掛かりに、米国東部に点在する彫像を実際に見学し、また書簡など文書資料も集め、分析・考察を進める。

#### 4. 研究成果

リアリズム文学とロマンスについて、併せて再考した。「リアリズム」の概念について、どのような議論が行われてきたか探るため、The Rockefeller Library 並びに The John Hay Library にて先行研究を収集・検証した。資料を概観すると「リアリズム」は「自然主義」あるいは「モダニズム」と対峙され議論・定義されることが多く、「ロマンス」と別個に論じられている。この模様は学問体系としての「アメリカ文学」が確立されていく過程と緊密にかかわり、学問的権威づけの観点から「ロマンス」研究が疎かにされている観が否めない。だが、アメリカ文学は本来 *The Atlantic Monthly* などの文芸誌上で小説家達が作品を競うことで形成されてきた。ここでは「ロマンス」は「リアリズム」が取って代わるべき対立概念で、「ロマンス」の影響は後々の「超自然」や大衆文化的なサブジャンルに至る。従って「ロマンス」と「リアリズム」を並列した再議論の必要性が窺われ、この論考をまとめつつ、リアリズムが主流と

なった 19 世紀末に、ロマンスに代わるリアリズム以外の選択肢としてクロフォードが「超自然」の分野に進出した様子、その創作技法についての考察を 2009 年 5 月にイタリアで開催されたクロフォード没後 100 周年記念国際大会で報告。

第二年度は、「クロフォード作品の映像化」の問題について調査を進めた。クロフォードのロマンス小説は三作品が映像化され、その所在を探したところ、*Mr. Isaacs* と *The White Sister* のみプリント作品を実際に視聴できた。*In the Palace of the King* については、プリントは現存していないようで、スチル写真や台本のみ入手できた。小説とその映画版を比較考察すると、映像の世紀が到来する以前からクロフォードが次世代の娯楽作品で求められる要因を的確に把握していたことがわかった。それはハリウッドという装置を通して、娯楽性のみを一段と純化させられるような要素であり、現代的なアレンジも可能なものだ。テキストの速い語りの展開や壮観さ、読者(視聴者)の心をつかむエキゾチックでメロドラマ的な要素が、初期のアメリカ映画製作者たちに独自の形で存分に生かされ映画化されている。サイレントとトーキー、二種類の版がある *The White Sister* の表象からクロフォード作品の語りの可能性や、イタリア・インドを舞台とする「国際」小説でハリウッドが繰り返し着目したアメリカ的イデオロギーの問題について考察を進めた。今年度で開催されたクロフォード没後 100 周年国際記念大会の参加に際し、クロフォード研究の現状を日本語で紹介する小論を『白山英米文学』に発表した。

最終年度は作家クロフォードの父、彫刻家 Thomas Crawford について調査を進めた。

成果は次の通り。伝記では、Robert Gale の代表的な評論の他に美術史や彫刻関係、美術館抄録で彫刻家への言及から、今日でも初期新古典主義彫刻家として、一定の評価を得ていることが分かった。クロフォードの作品をリッチモンド、ワシントン、ボストン、ニューヨークなどの諸施設で実際に見学したが、やはり今でも代表的なアメリカ彫刻家として重要視されている様子が観察できた。現存する書簡などから彫刻家の人脈が明らかとなり、名門ウォード家出身の妻 Louisa をはじめ、弁護士で後、上院議員となる Charles Sumner やローマで領事を務めた歴史家の George Washington Greene などボストン・ブラーミンの支持を得て、ワシントン議事堂上の「自由の女神」像などの偉業を成し遂げた様子が分かる。ここに上記の人物たちがローマとアメリカを行き来した国際的な交友の結果、アメリカに新たな「彫刻文化」を根付かせた過程が見られ、筆者が 19 世紀末に国際小説家を中心に構築されたと考えていた「アメリカ文化圏」が、既に 19 世紀中葉、幅広い分野の人材を含む母胎を形成しはじめた様子を実証できたのは大きな収穫であった。先述した文化人の相互影響のもと、詩人ロングフェローと彫刻家クロフォードは 1850 年代に両者ともネイティブ・アメリカンを題材として創作をしており、詩と彫刻と異ジャンルではあるが、その表象について本年(2011 年)のアメリカ学会年次大会で口頭報告を行う予定である。また彫刻家についての評伝は『白山英米文学』(第 36 号)に発表した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

北原妙子、「彫刻家トーマス・クロフォード その人と作品」、『白山英米文学』、査読無、36 巻、2011、65-82

Taeko Kitahara、“F. Marion Crawford’s Supernatural World: The Art of Narration”、*A Hundred Years After: New Light on Francis Marion Crawford*、査読有、2011、73-83

北原妙子、「F・マリオン・クロフォード研究の現在 没後 100 周年国際記念大会に参加して」、『白山英米文学』、査読無、35 巻、2010、55-69

Taeko Kitahara、“The Legacy of F. Marion Crawford: *Corleone* and *The Godfather*”、*The Journal of American and Canadian Studies*、査読有、26 巻 2009、83-103

〔学会発表〕(計 2 件)

北原妙子、「共和国のためのアート：彫刻家クロフォードと詩人ロングフェロー」、『アメリカ学会、2011 年 6 月 4 日、東京大学 駒場キャンパス

Taeko Kitahara、“F. Marion Crawford’s Supernatural World: The Art of Narration”、Francis Marion Crawford: Cento Anni Dopo、2009 年 5 月 15 日、Grand Hotel Cocumella, Sorrento

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

北原 妙子 (KITAHARA TAEKO )  
東洋大学・文学部・准教授  
研究者番号：90315820

##### (2) 研究分担者 ( 0 )

##### (3) 連携研究者 ( 0 )